

第2節 尾張国分寺系瓦について

1. はじめに

尾張地方の古代寺院は約40ヵ寺が確認されている。しかしながら発掘調査がおこなわれた寺院は少なく、瓦の散布地が寺院跡であるのか、官衙跡であるのか、あるいは瓦窯であるのかさえも明らかでない場合が多い。また瓦の研究もこのような状況下では軒瓦中心の採集資料にたよるところが大きく、瓦当文様に主眼が注がれてきた。今回、堀之内花ノ木遺跡の調査で尾張国分寺の瓦が多量に出土したことを契機に、寺院の瓦の大部分を占める平瓦、丸瓦についておおまかな分類をおこなった(第3章第2節)。その結果をもとに尾張国内を概観することで、軒瓦以外の視点を模索してみたい。

小論では、まず尾張国分寺関連の瓦研究について概観し、軒瓦、平瓦、丸瓦の順に検討をすすめる。

2. 研究抄史

創建瓦の
設定

尾張国分寺の軒瓦は、昭和36年の発掘調査成果に基づく稲垣晋也氏の型式分類以来、新たな型式の追加は認められない(稲垣1968)¹⁾。稲垣氏は奈良時代の軒瓦の組合わせを昭和55年、奈良国立博物館特別展『国分寺』で軒丸瓦MⅢ・軒平瓦HⅠ-B、軒丸瓦MM-A・軒平瓦HⅢ-Aの2組に修正し、前者を創建瓦とした²⁾。また梶山 勝氏は名古屋市博物館部門展『尾張の古代寺院と瓦』(昭和60年開催)における新知見をもとに、稲垣氏の論を踏まえつつ、尾張国分寺の軒瓦と同型瓦をもつ寺院の分布について論考している(梶山1991)³⁾。そのなかで梶山氏は尾張南部の寺院に同型瓦が多く分布することから、その地方の豪族が国分寺造営に大きく貢献した可能性を指摘した。さらに大安寺式軒瓦の組合わせを創建瓦の1つに加え、平城宮式や大安寺式など新来の製作技術が当地方の軒瓦に大きな変革を与え、このことは尾張国内の地方豪族の造寺活動と密接な関係をもつとも指摘している。

国分寺建立
の背景

その後、平成4年に第9回東海埋蔵文化財研究会「古代仏教東へー寺と窯ー」が開催され、愛知、岐阜、三重、静岡の研究成果が報告された。そのなかで梶山氏は尾張国の白鳳期の寺院を軒瓦の型式から、素弁蓮華文軒丸瓦が特徴の尾張北東部、美濃と関係が深い複弁蓮華文が特徴の北西部、素弁蓮華文で重圈縁をもつ軒丸瓦が特徴の伊勢湾を巡る南部の3勢力に区分し、政治的配慮によって、勢力の接触地点である中島郡に国府、国分二寺が設置された可能性があることを指摘した⁴⁾。これと同様の見解は服部信博氏によって後期古墳、式内社、寺院の分布密度から、在地勢力の弱い中島郡への中央勢力進出が論じられている(服部1993)⁵⁾。



第54図 尾張の古代寺院分布図

3. 尾張国分寺系軒瓦

近年増加した尾張国内の古代寺院調査成果を受けて尾張国分寺使用の軒瓦について整理しておきたい。すでに尾張国分寺使用の軒瓦の内でその幾つかが同範資料を持つことが指摘されている。他の寺院におけるこうした尾張国分寺使用の軒瓦との組み合わせを考慮しつつ、ここでは今回の発掘調査成果を踏まえてその変遷をまとめてみることにしたい。

(1) 4つのグループ

尾張国分寺使用の軒瓦は、すでに尾張国分寺第1次の調査により稲垣氏によって軒丸瓦が9型式に、軒平瓦が8型式に分類されている。⁹⁾ 今回の調査によってもこの枠を外れる資料の追加は認められない。これらの資料を同範資料が出土した各寺院での組み合わせや梶山氏の研究⁷⁾に基づき4つのグループにあらためてまとめることができる。それらは概ね組み合わせとデザインの共通性によって分類されるもので、A・B・C・Dグループとする。

各グループ の特徴

Aグループは軒丸瓦MⅠ・Ⅱ型式を含め、現状では軒平瓦は不明瞭である。稲沢市東畑庵寺にMⅠ型式が存在する。尾張国分寺使用軒瓦では資料的にCグループとともに少数派に属する。

Bグループは尾張国分寺使用の軒瓦の中核をなすもので、さらに3つに細分する。B₁は軒丸瓦MⅢ型式、軒平瓦HⅠ-A・B型式の組み合わせが考えられる。B₂は軒丸瓦ではMN型式、軒平瓦ではHⅠ-C・HⅢ・HN型式を含めて考える。最も同範関係が多いもので、尾張国内ではその使用が高い一群の軒瓦といえよう。B₃は軒丸瓦MⅦ・Ⅷ型式、軒平瓦ではHV・HVⅡ・HⅦ・HⅧ型式を含める。

Cグループは軒丸瓦MV・MVⅡ型式、軒平瓦HⅡ型式の組み合わせが相当する。前述したようにHⅡ-A型式は平城宮6712-C型式と同範であり、梶山論文では奈良大安寺系として指摘されたものである。現在の調査段階の資料に基づけば、量的には少数派に属する。

Dグループとしたものは軒丸瓦MK型式である。その他、系統的な問題から特徴的なハート型子葉素弁四葉文系統のデザイン(以下四葉文系)を全て含めて考える。さらに軒平瓦として尾張国分寺HN型式からの変化を想定できる、法性寺に代表される軒平瓦(以下法性寺系)も含めることになる。尾張南部に多く分布する特異な一群の資料と考えられる。

以上の4つのグループを広義の尾張国分寺系軒瓦とし、その中核となるBグループを狭義の尾張国分寺系軒瓦と呼ぶことにする。ここでは特に断わらないかぎり「尾張国分寺系軒瓦」とは前者を意味する。

(2) 段階

以上の4つのグループがいかなる系統的な変遷を示すものかを考えて行きたい。それには量的にも最も多くを占め、主体的な軒瓦という位置づけが可能なBグループでの変化を見通すことから始める必要があるだろう。つまり狭義の尾張国分寺系軒瓦の動向が、尾張国分寺系の瓦製作を物語っていると考えられるからである。

さてB₁グループとしたMⅢ型式とHⅠ型式の組み合わせが、尾張国分寺創建瓦という位置づけは、その系統的な変遷を考慮しても最も妥当な見解と考えられる。現状では尾張国分寺以外に同范資料を確認できず、尾張国分寺創建に際し新たに創出されたデザインと考えられる。今回の発掘調査では、興味深いことにSD13資料の中ではB₁グループとした資料以外の軒瓦を確認できず、この組み合わせが最も遡る資料であることをあらためて確認させる良好な事例と考えたい。つまりそこにはB₂・B₃グループが存在しておらず、この時点ではあるいはB₂・B₃グループが製作されていない可能性すら考えられるのであ

1段階・2段階
る。今ここでSD13への廃棄段階を1つの契機として、前後の2時期に細分する。前者を尾張国分寺系軒瓦1段階とし、後者を2段階とする。

尾張国分寺系軒瓦2段階の資料はB₂・B₃グループを総括するが、ここで注目したいのは、文献資料による国分寺焼失記事(884年)に関連するSE03出土資料である。SE03からは第22表のような軒瓦が出土している。つまりMⅦ型式、HⅥ・Ⅷ型式といったB₃グループが主体的な在り方を示す傾向が窺える。するとB₂グループとB₃グループとは若干時期的な隔たり(2段階古相・新相)を想定できないこともない。今後の資料の増加をまって細分が可能である点を指摘しておきたい。

さて最後にDグループの所属の問題である。海部郡菟目寺町法性寺での組み合わせを前提に考えると、軒平瓦HN型式と法性寺系軒平瓦とはその変遷に系統的な前後関係のあることが容易に推察できよう。また尾張国分寺軒丸瓦MK型式が極めて少量である点を踏まえると、Dグループの製作が尾張国分寺系軒瓦2段階新相を大きく遡ることは考えられない。そこで特徴的な四葉文系軒丸瓦の製作を第3段階と考えておきたい。

3段階

以上から尾張国分寺系軒瓦の製作環境を1～3段階に区分できたことになる。

(3) 製作年代

1段階の年代
尾張国分寺系軒瓦第1段階を創建～SD13廃棄段階と考えると、その年代幅はSD13共伴資料を基にすると鳴海32号窯式～折戸10号窯式期に比定でき、8世紀後半期の内にあると考えることができよう。さらに限定し749年の生江臣安久多の記事を考慮すると、この

2段階の年代
段階における創建瓦(B₁グループ)の製作を十分に想定できよう。次に2段階であるが、最も注目すべき資料はやはりSE03出土資料である。共伴した灰釉陶器は黒笹90号窯式期であり、尾張国分寺焼失記事(884年)がこの段階を包含する時期であると考えると、2段階はそれ以前ということになり、井ヶ谷78号窯式・黒笹14号窯式期がその中心的な時期と考えることが可能となる。さらに関連記事を参照すれば、前述したようなSD13廃棄が

3段階の年代

775年の異常風雨記事に深く関係する出来事であると考え、この時点以降に第2段階を想定できることになる。ここではおおむね8世紀末葉～9世紀前葉を中心として考えておきたい。すると第3段階を9世紀中葉～後葉にかけての時期に想定できるようであり、尾張国分寺軒丸瓦MK型式が国分寺が焼失したとされる884年段階ですでに使用されていた点を踏まえると、四葉文系の成立を9世紀末葉段階にまで下げて考える必要はないものと思われる。以上の系統的な変遷を図化したものが第55図である。

(4) 軒瓦の系譜

ところでAグループ及びCグループについては、今回の調査においても具体的手掛かりを得ていない。ただMV型式がSD13資料の中に見出しえる点は留意したい。またデザイン的な視点を優先させるとやはり創建段階である第1段階に遡らせる必要がある。すると第1段階ではB₁グループを中核としてその周縁にA及びCグループの参画があったことになる。Cグループが奈良大安寺系である点を強調し、この時点における新技術導入の背景とする見解は傾聴に値するものである⁹⁾。ここではこうした視点を踏まえて以下のよう

小結

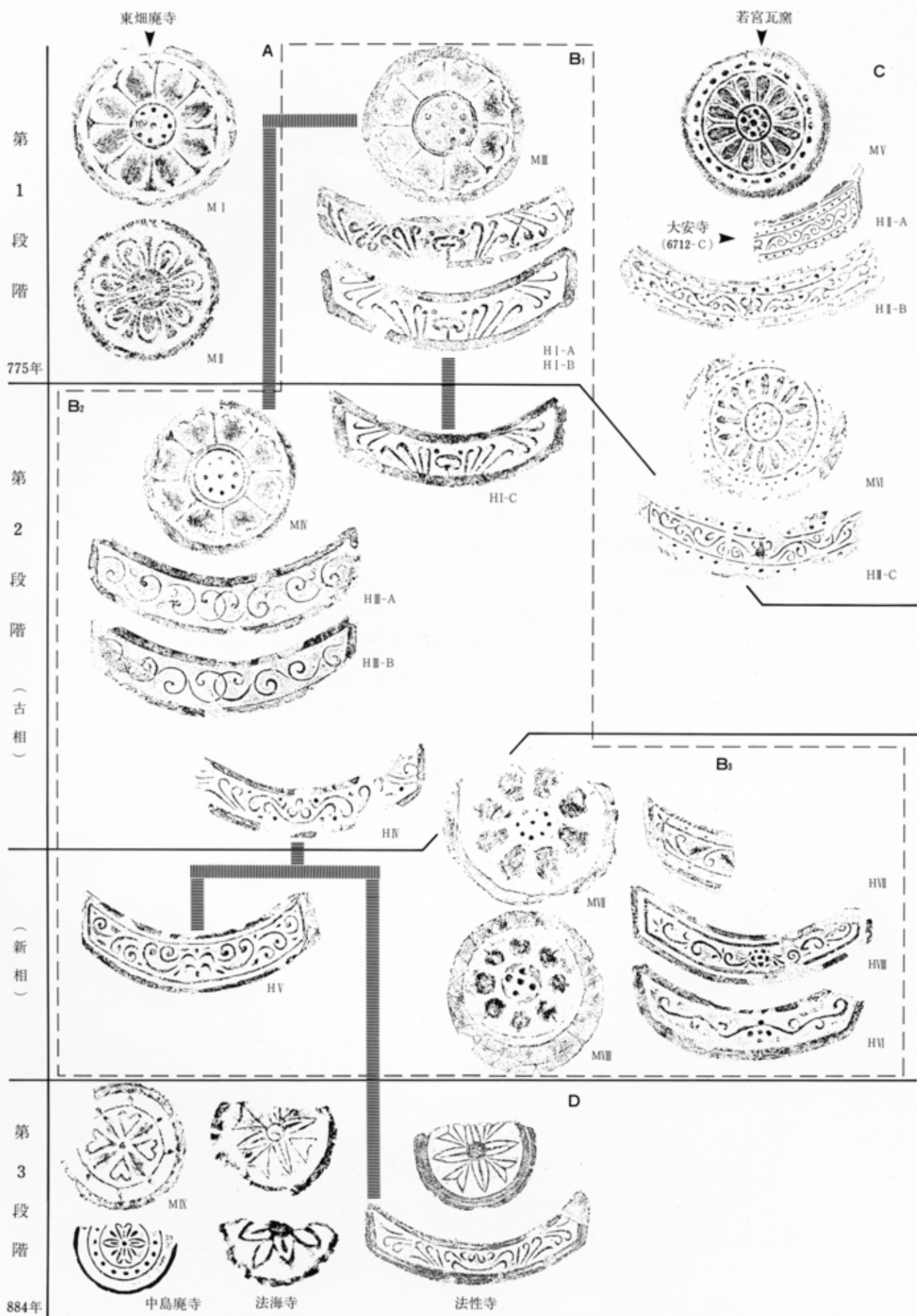
尾張国分寺系軒瓦第1段階では創建を含めて、複数の外的なデザイン・技術の導入が計られ、その中核としてB₁グループが選定された。同時に後述する平瓦一枚作りの製作があらたに導入されることになる。

8世紀末葉の第2段階になると、尾張国分寺の造改築とともにB₂・B₃グループがB₁グループのデザインを踏襲しつつ創作される。その時点での画期は尾張南部に尾張国分寺系軒瓦同范資料が拡散する点である。この時点で始めて尾張国分寺を中心とする瓦製作の普及が想定できる。

最後に9世紀中葉以降の第3段階である。これに係わる四葉文系軒丸瓦は中島郡を中心に分布し、その分布の背景が今後問題となろう。ここでは尾張国分寺系軒瓦の新たな独自色の創出として評価したい。

グループ		軒 丸 瓦		軒 平 瓦	
A		M I	東畑庵寺		
		M II			
B	1	M III	A	H I	A
			B		B
			C		
	2	M IV	A	H I	C
			淵高庵寺、大永寺		鳴海庵寺
	3	M V	B	H III	A
			妙興寺、鳴海庵寺		淵高庵寺、大永寺
		M VI		H IV	B
			其目寺		名和庵寺
				H V	東畑庵寺、淵高庵寺
C		M V	元興寺、古観音庵寺	H VI	東畑庵寺
		M VI	若宮瓦窯	H VII	東畑庵寺
				H VIII	鳴海庵寺
D	四葉文		国分寺(MK)、法性寺		名和庵寺
			法海寺、中島庵寺		
			弥勒寺庵寺		

第31表 尾張国分寺系軒瓦分布一覧



第55図 尾張国分寺系軒瓦変遷図

4. 平瓦一枚作り製作について

尾張国分寺の調査による平瓦分析においては、資料のすべてが基本的には一枚作りのものであった。そこでこうした平瓦一枚作り製作が、どのような経緯で尾張国分寺に採用されていったのかが、次に問題となる点であろう。尾張地域の古代寺院を概観すると、むしろその多くの寺院が一枚作り平瓦を主体として採用しておらず、こうした寺院との関係が問題となり、いかなる時点から尾張地域において平瓦一枚作りが行なわれていったのかを考えてみる必要がある。そのためにはまずは尾張における平瓦製作の分類から始めなければならない。

(1) 平瓦分類

ここでは以下のような基本的な製作技法を基にした分類を行なうに留めたい。それは尾張地域の古代寺院をとりあえず概観するにはこの程度でも有効と考えるからである。分類の基本は製作技法にあり、まず基本的な点で桶巻き作りと一枚作りに大きく大別できる点は周知のことである。さらにその製作時に使用する粘土の状況によって、粘土板と粘土紐に2分できる。製作手順に添えばその後には凸面の調整、さらに分割、凹面の調整、端側面の調整等と連続するのであるが、ここではその内の凸面調整法と凹面調整法に限定して考えることにした。なお端側面の調整は補足的に使用する。こうした製作手順の組み合わせによって複数の群が認められ、それを以下のように整理する。まず大きく使用粘土形態と製作台の組み合わせによりⅠ～Ⅳ類の4つに大別する。

分類 Ⅰ類は粘土板桶巻き作りを基本とするもの。

Ⅱ類は粘土紐桶巻き作りのもの。

Ⅲ類は粘土板凹型桶台作りのもの。

Ⅳ類は粘土板一枚作りのものである。

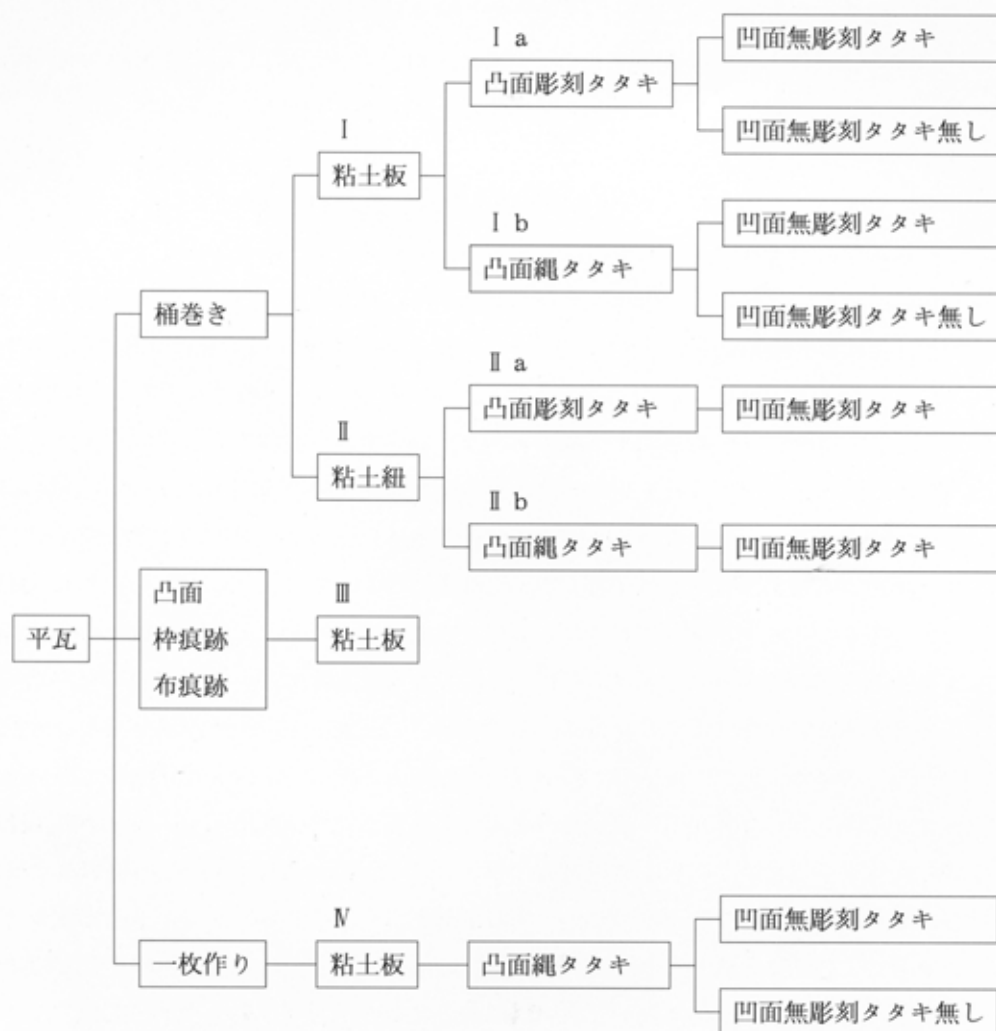
細分 こうした大分類をさらに製作技法・道具によって細分する。Ⅰ類は凸面調整の道具によって彫刻タタキ(Ⅰa)と縄タタキ(Ⅰb)に2分できる。さらにⅠ類は凹面調整における無彫刻タタキの有無や、凸面タタキのナデ調整等の有無によって、製作手順の微妙な差異が認められ、その組み合わせと順序によって系統的な変遷が類推できる。Ⅱ類はやはり凸面調整の道具によって彫刻タタキ(Ⅱa)と縄タタキ(Ⅱb)に2分できる。さらにその他の手順を概観すると、特に凹面調整における無彫刻タタキはかなり普遍的に認められ、その有無という視点よりもⅡ類の基本技法として凹面無彫刻タタキが位置づけられる。Ⅱaとした凸面彫刻タタキを使用するものは極限られ、粘土紐を使用する特徴的な製作法であるⅡ類はⅡb類凹面彫刻タタキという単一技法で総括できる。Ⅲ類はいわゆる「凸面に杵圧痕・布目」を留める一群の平瓦製作技法である。濃尾平野では従来から岐阜
法海寺の凸
面布目瓦 県関市の弥勒寺出土平瓦が著名であったが、今回あらたに知多市法海寺にその使用を確認することができた²⁾。その系譜も大変興味深いものがある。Ⅳ類は尾張国分寺に採用された

平瓦一枚作りであり、粘土板・凸面平行縄タタキ・凹面無彫刻タタキという一連の製作手順による技法によって総括でき、ここでは細分は行なわない。しかし離れ砂・端側面の調整・大きさ・形態・厚さ等により、形状の細分類は可能ではある。

(2) 尾張国内の状況

尾張国内での平瓦の採用を概観してみると、第32表のようにまとめることができる。一寺院には複数の平瓦類が使用されることがむしろ普遍的に認められるのではあるが、その使用比率には一般に大きな偏りが存在することは多くの事例によって明らかにされている。しかし一方で2ないし3つに均衡する比率を示すものもまた存在する。例えば後者の事例としては春日井市に存在する勝川廃寺はその典型的なもので、本分類におけるⅠb類とⅡb類が、それぞれの軒瓦類を伴ない勝川廃寺使用瓦類を構成する!⁹⁾ こうした具体的な事例を踏まえて、あらためて尾張地域の古代寺院を概観すると、平瓦分類の分布に興味深い小地域的なまとまりが存在することが確認できる。今これらを大きく6地区に区分して考えてみたい。まず葉栗郡周辺であるが、音楽寺・黒岩廃寺・花井薬師堂廃寺等には粘土板桶巻き彫刻タタキのⅠa類が存在し、尾張国内でも最も古い瓦製作の可能性を残す一群のまとまりが存在する。これらには美濃地域の平瓦製作と同調する部分も多いように思われる。次に丹羽郡西部地区で、長福寺廃寺・御土井廃寺・伝法寺等には粘土板桶巻き縄タタキのⅠb類が主体を占める。その東側である春部郡では勝川廃寺・川井薬師堂廃寺・大山廃寺といったように粘土紐桶巻き凸面縄タタキ凹面無彫刻タタキの特徴的なⅡb類が分布する。その一方で海岸部では、まず海部郡を中心にⅠb類とした粘土板桶巻き凸面縄タタキが主体的に分布し、その東方の愛智郡ではⅠa類とした粘土板桶巻き凸面彫刻タタキが多く分布する。なおⅢ類が存在する法海寺はこの地区に所在するが、法海寺の主体的な平瓦はⅠa類である。こうした分布の中で、海岸部と犬山扇状地に分布するⅠ類平瓦分布域に挟まれた空白域である中島郡には、尾張国分寺を代表としてⅣ類である粘土板一枚作り凸面縄タタキ凹面無彫刻タタキの一群の平瓦が多く分布することになる。

以上のおおまかな分布を概観すると、春部郡・中島郡以外の地区は基本的にはⅠ類とした粘土板桶巻き技法を用いる瓦が広く分布する地区ということになる。その中では凸面タタキの道具としては彫刻と縄の違いが表面化することになるのであるが、なお日光川・五条川水系には縄タタキが主体的に分布するという見方もできよう。すると彫刻タタキの分布はアユチ湯周辺部と葉栗郡という異なる2つの小地区での分布といった図式も認められる。後者は美濃地域との関係が、前者は伊勢地域との関係も考慮しなければならないのかもしれない。いずれにしろこうした基本的な分布を系統的なものと置き換えると、まずはその内部での平瓦分類の細分とその変遷を考えねばならない。そしてその後初めて他の地区との比較検討を行ない尾張全体の平瓦製作の変遷表が出来上がるものとする。こうした基本的手順を踏まない分類時期区分は、混乱を導きだすだけであり避けるべきであろう。



分類		寺	院
I	a	花井薬師堂廃寺、清林寺、元興寺、法海寺、 名和廃寺（トメキ遺跡）、西大高廃寺、（音楽寺）	
	b	黒岩廃寺、長福寺、妙興寺、伝法寺、諸桑廃寺、篠田廃寺、 勝川廃寺、甚目寺、寺野廃寺、小幡西新廃寺、（東畑廃寺）	
II	a	勝川廃寺、大山廃寺、川井薬師堂廃寺、	
	b	（黒岩廃寺）	
III		法海寺	
IV		尾張国分寺、中島廃寺、淵高廃寺、東畑廃寺、小幡花ノ木廃寺、法性寺、 法海寺、鳴海廃寺、（諸桑廃寺）、（大山廃寺）、	

第32表 平瓦分類表

(3) 製作時期

ここでは一枚作りの製作時期について特に検討を加えておきたい。一枚作りの分布は第32表ようになるが、その内中島郡での一枚作りをまず観察して行くと、その分布する寺院は尾張国分寺系軒瓦の分布と基本的には一致する傾向が窺える。尾張国分寺系軒瓦が存在する寺院では必ず平瓦N類が主体的に採用され、その逆は基本的には存在しない。また前述した尾張国分寺系軒瓦の変遷を考慮すると、明らかに尾張国分寺における一枚作り製作を著しく遡るような資料が、尾張地域では確認できないのが現状と考えられる。つまり

中島郡のN類

中島郡に分布が偏る平瓦N類は、尾張国分寺の造営を1つの契機として導入され、普及して行くと帰結するのが、最も妥当な見解と思われる。

元興寺

ところで尾張国分寺に採用された平瓦一枚作りとは、やや趣を異にするN類も尾張国内では確認できる。まず尾張元興寺に存在する一群の一枚作り平瓦である(尾張元興寺分類V類)。ここでの資料は特に凹面無彫刻タタキが行なわれない資料が目立ち、中島郡に広

大山廃寺

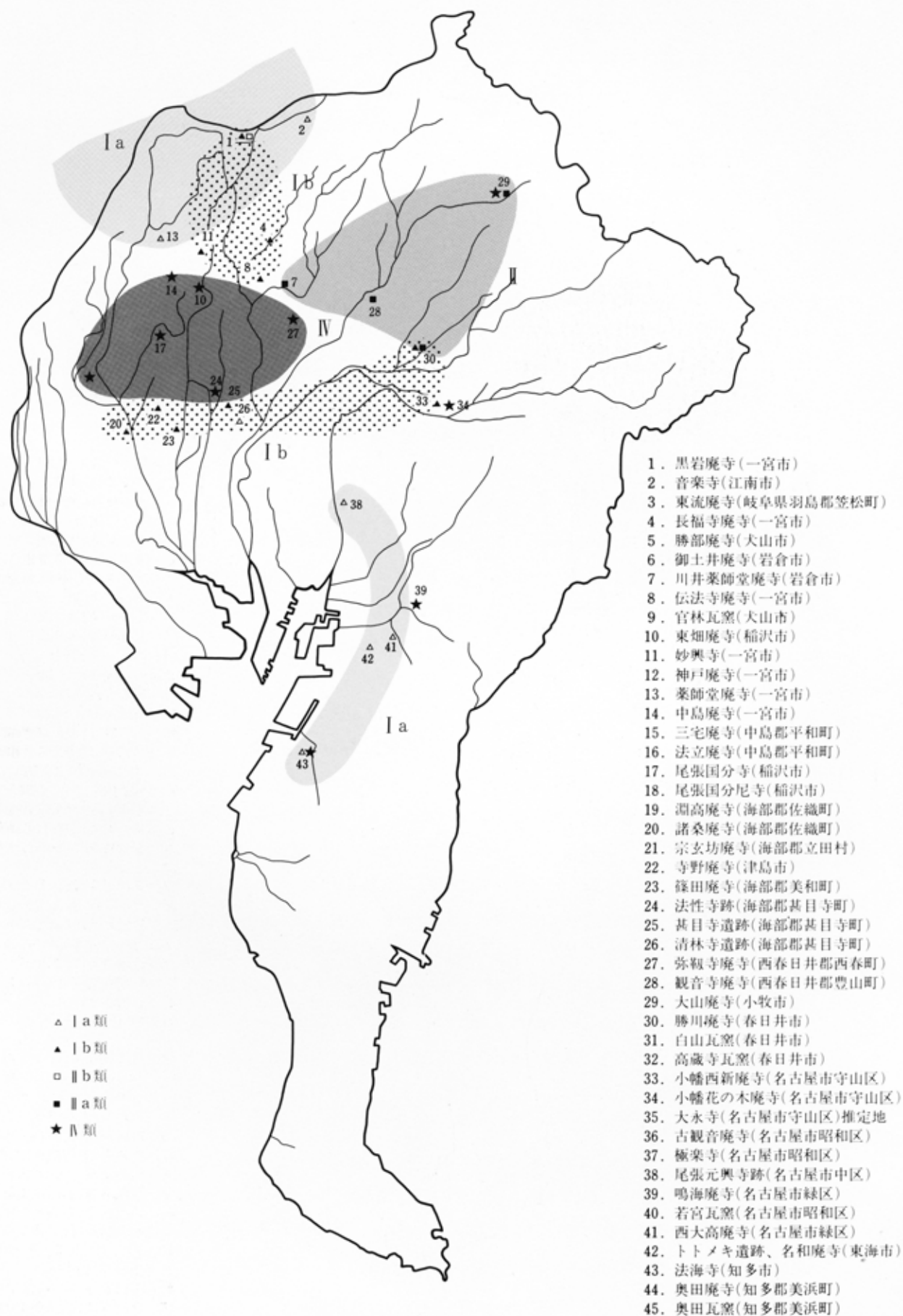
く展開する一枚作りには必ず明瞭に凹面無彫刻タタキを行なう点と異なる。次に大山廃寺出土の資料がある。凹面無彫刻タタキはむしろ顕著に施されるのであるが、凸面の縄タタ

甚目寺

キにおける縄目の粗さが目立ち、さらに離れ砂が確認されない。最後に甚目寺の資料である(甚目寺分類Ⅲ類)。甚目寺の一枚作りは、その側面調整に特徴が存在する。つまり平瓦N類の側面調整は、一律に凹型整形台に沿った調整のために著しい斜面を形成するのであるが、甚目寺資料は桶巻き技法分割と同じく垂直になることが多い。また凹面調整に無彫刻タタキやナデといった多様な形態をもつようである。以上の内で、大山廃寺のみは尾張国分寺系軒瓦が確認されていない唯一例外的なN類使用寺院である。他の2者からは尾張国分寺系軒瓦が出土しており、特に尾張元興寺は尾張国分寺の廃絶(884年)に伴ないその機能に移管すると記録された寺院でもある。これらの寺院での一枚作りは大山廃寺以外はその使用も極めて客体的であり、著しくN類の使用を遡らせるような積極的な資料は存在しないようである。こうした諸点を総合すると、尾張国分寺に使用された一群の平瓦粘土板一枚作りが最も安定した製作環境と想定でき、さらにその分布も中島郡に集中する。したがって尾張国分寺使用平瓦をN類の中心的な存在、かつ中心的な分布域と考える点は許されるであろう。するとその周辺部における資料として大山廃寺・甚目寺・尾張元興寺が位置づけられることになる。こうした周縁資料の中に尾張国分寺N類に先行する資料を見出す要因は現状では存在しない。したがって尾張国分寺の成立が溝SD13の資料から鳴海32号窯式内に存在すると考えると、尾張国における一枚作りの本格的な導入はこの時点まで待たねばならないことになる。それはおおむね奈良時代の8世紀中葉と考えておくことができよう。

生産地の状況

次に生産地における状況を見ておくと、すでに指摘しておいたように篠岡窯において大きな変化を窺い知れる。¹⁾つまり奥山久米寺軒丸瓦との同范が指摘された資料が共伴した篠岡2号窯と篠岡78号窯の使用は、凸面スリケン調整が施された粘土板桶巻き技法のI類であるが、篠岡66号窯資料は明らかに一枚作りのものでN類に所属する。ただしその形態



第56図 平瓦分類分布図



第57図 平瓦Ⅳ類(一枚作り)分布図

・製作は尾張国分寺系統とは異なる。篠岡2号窯はその出土した須恵器から岩崎17号窯式に併行することが指摘されている。同様に篠岡78号窯は岩崎41号窯式併行の標識資料である。篠岡66号窯はやや幅をもつものの須恵器杯蓋の特徴は鳴海32号窯式を著しく遡る資料ではない。すると尾北窯の編年では高蔵寺2号窯式の段階までの中で確実に平瓦一枚作りを行なった形跡は認め難いのである。以上のようにおおまかなところ消費地と生産地（篠岡古窯では瓦焼成は極めて限定される）において、尾張国内では7世紀前葉以前に一枚作り製作が遡る可能性は極めて少ないことになろう。このような点を総合すると、尾張国分寺の造営に伴ない平瓦一枚作りが新たに尾張国内に導入されたとした上記の見解を裏

N類の年代観 付けることになろう。さらに加えれば尾張国分寺系統のN類平瓦そのものの製作年代は、灰釉陶器生産の段階まで下降する積極的な資料も認め難い。つまり尾張国分寺系統のN類平瓦の生産を鳴海32号窯式・折戸10号窯式を中心とする8世紀中葉～後葉に位置づけることができるようであり、全体的には桶巻き作りから一枚作りへの変換点をこの時点に求めて考えておきたい。以上の見通しは尾張国内ではN類をもって時期的な指標と考える手掛かりを得たことにもなる。

5. 丸瓦製作について

今回の調査で出土した丸瓦は、行基丸瓦（KAⅠ）、側面調整c手法の玉縁丸瓦（KAⅡa）、側面調整a・b手法の玉縁丸瓦（KAⅡb）の3つに分類した（第3章第2節）。このうちKAⅠは、出土量から考えても丸瓦の主体にはなり得ず、尾張国分寺では玉縁丸瓦が採用されたことが明らかであり、さらに7：3の比率で側面調整a・b手法の玉縁丸瓦（KAⅡb）が優勢である。ここでは尾張国分寺における丸瓦の様相が、尾張地域の古代寺院建立のなかで、いかなる位置に属するのかを考えてみたい。

（1）丸瓦分類

尾張地域の古代寺院について丸瓦にスポットをあてて考える際、製作技法から基本的な分類を行う必要がある。丸瓦は行基丸瓦と玉縁丸瓦に大別でき、さらに使用する粘土の形状によって、粘土板と粘土紐に2分できる。この組合せによりⅠ～Ⅳ類に大きく分類する。

分類 Ⅰ類は行基丸瓦で粘土板から製作されるもの。

Ⅱ類は行基丸瓦で粘土紐から製作されるもの。

Ⅲ類は玉縁丸瓦で粘土板から製作されるもの。

Ⅳ類は玉縁丸瓦で粘土紐から製作されるもの。

細分 この分類を凸面調整（タタキ）、分割後の側面処理を要素として細分する。Ⅰ類は凸面調整の道具によって彫刻タタキ（ⅠA）、縄タタキ（ⅠB）、ハケ目（ⅠC）、さらに側面の処理手法（a～c手法）に細分する。Ⅱ類は尾張地域において、現在までのところ出土例を知らない。Ⅲ類は凸面調整の道具によって彫刻タタキ（ⅢA）、縄タタキ（ⅢB）、さらに側

面の処理手法（a～c手法）に細分する。ⅢB類は勝川廃寺が知られるのみである（ⅢB類・c手法）。なお凸面調整についてはタタキを施した後、丁寧に道具の痕跡をナデ消すものがあるが、破片資料の観察に適さず、今回は細分に含めない。

（2）尾張国内の状況

尾張国内での丸瓦の採用は第33表のようにまとめることができる。平瓦同様、一寺院に複数の丸瓦類が葺かれること、主体となる瓦類が1つに限定できる寺院と複数存在する寺院があることなどを考慮にいれて尾張国内を概観すると、丸瓦の分布には2つの小地域的なまとまりが存在することがわかる。その1つはⅢA類・c手法の1群で、愛智郡から知多郡のアユチ湯周辺に分布する。彫刻タタキはこの地域以外では葉栗郡の黒岩廃寺、春部郡の勝川廃寺にみられるが、ⅢA類・c手法であるため同一系統とは考えにくく、勝川廃寺にいたっては縄タタキが主体をなし、ⅢA類・c手法の丸瓦は少数である。いま1つは中島郡、海部郡を中心に分布するⅢB類・a手法の1群である。尾張国分寺でもこの丸瓦（堀之内花ノ木遺跡KAⅡb）が主体となり、淵高廃寺では前述の尾張国分寺系軒瓦B₂グループが、中島廃寺、法性寺ではDグループが採用されている。さらに地域的なまとまりからは外れるもののⅢB類・a手法が主体となる愛智郡の鳴海廃寺でも尾張国分寺系軒瓦B₂グループが出土しており、山田郡の小幡花の木廃寺については軒瓦の出土はなかったが小幡地内の大永寺（所在地不明）からBグループの軒平瓦が出土した記録が残る^{1,2)}。またこの類の瓦が客体的なありかたを示す愛智郡の元興寺、中島郡の東畑廃寺、海部郡の甚目寺、諸桑廃寺の4ヵ寺のうち諸桑廃寺を除く3ヵ寺からはやはり尾張国分寺系軒瓦が出土している。これらの点からⅢB類・a手法の丸瓦は尾張国分寺系軒瓦と密接な関連をもつことが想定される。以上2つの小地域的なまとまりについて概観した。これ以外にも幾つかの地域的なグルーピングが可能であると思われるが、未調査の寺院跡も多いため資料の増加を待って検討したい。

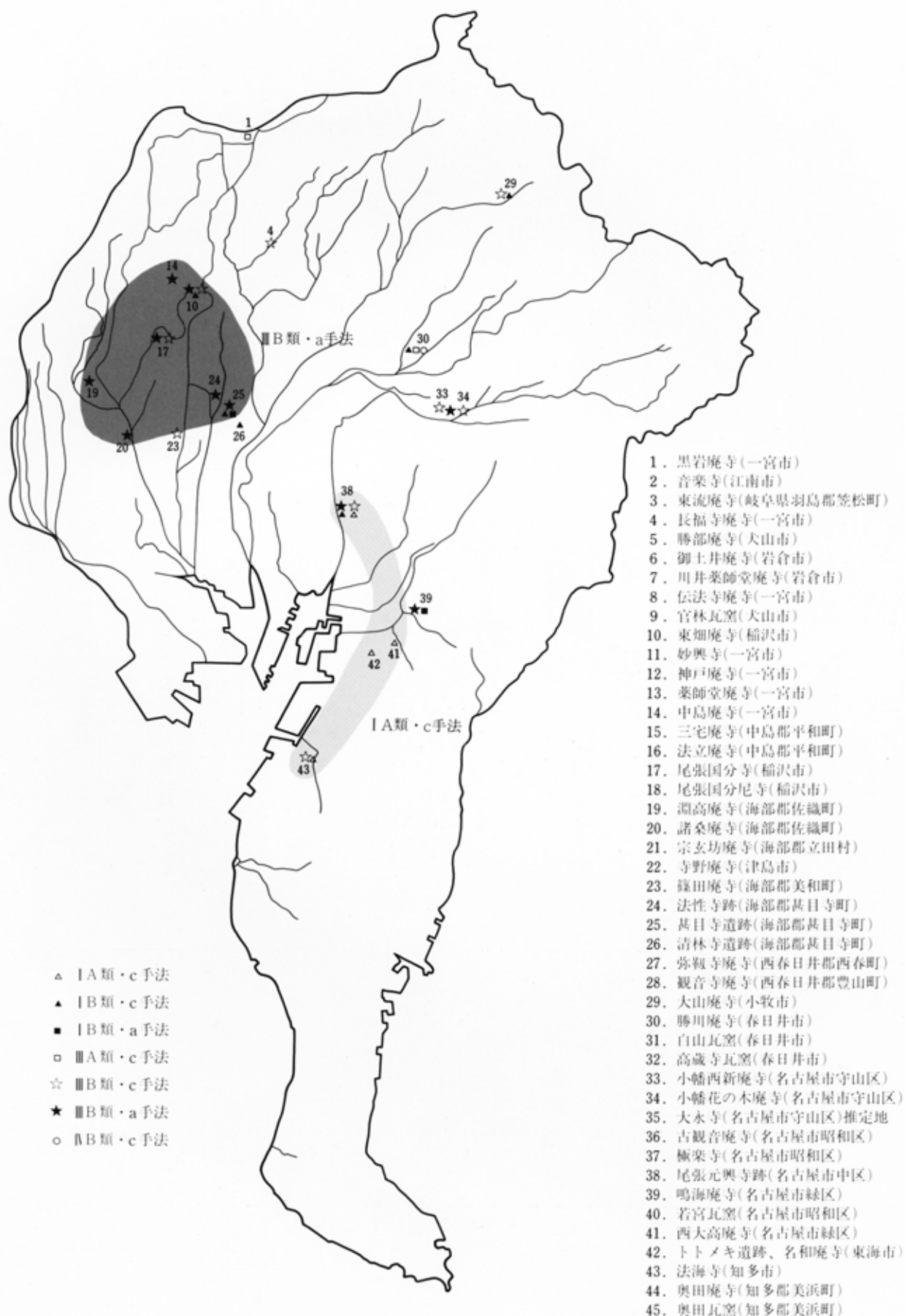
（3）製作時期

ここでは玉縁丸瓦で粘土板から製作されるⅢB類・a手法の丸瓦について特に検討を加える。尾張国分寺は今回の調査によって、ⅢB類・c手法とⅢB類・a手法がおおよそ3：7の比率で出土し、この比率はSD13の一括資料でも大きく変わらない。このことは前述の尾張国分寺系軒瓦第1段階（鳴海32号窯式～折戸10号窯式期）における丸瓦の様相を示す。ⅢB類・c手法からⅢB類・a手法という丸瓦製作技法の変遷を仮定すれば、この時期がc手法からa手法への変遷期であるといえる。この観点にたてば、c手法主体の元興寺、東畑廃寺、甚目寺、諸桑廃寺は尾張国分寺に先行する様相が強く、補修や造改築に際して、尾張国分寺系軒瓦とともにⅢB類・a手法の丸瓦が使用されたと考え、c手法をほとんどもたない寺院（中島廃寺、法性寺など）は後出的と考えるのが最も妥当であると思われる。

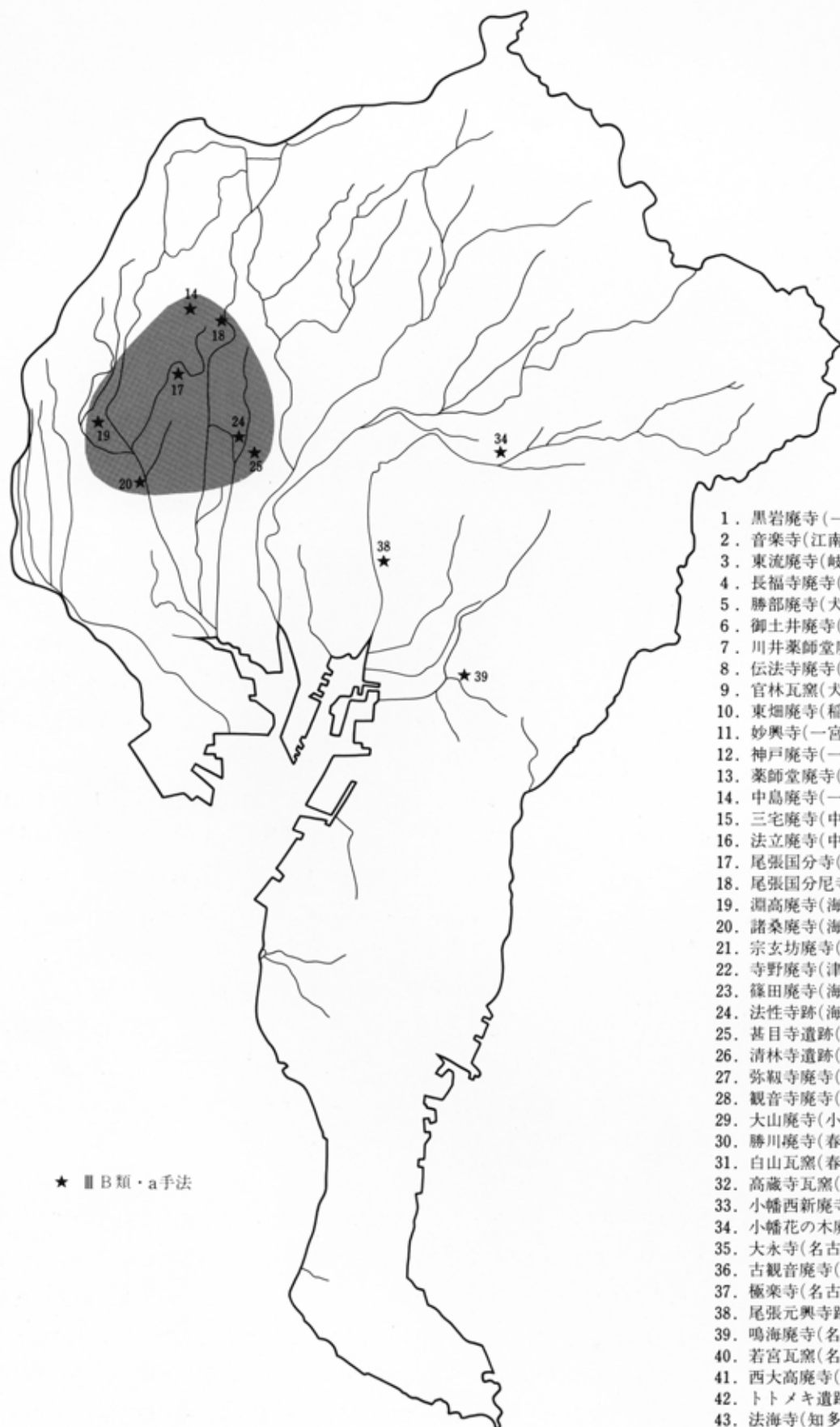


分類	c 手法	b 手法	a 手法
Ⅰ	A 名和庵寺 (トムメキ遺跡), 西大高庵寺, (元興寺), (法海寺).		
	B 大山庵寺, 甚目寺, 清林寺, 勝川庵寺, (元興寺), (東畑庵寺).		(甚目寺), (鳴海庵寺)
	C (甚目寺)		
Ⅱ			
Ⅲ	A 黒岩庵寺, (勝川庵寺)		
	B 長福寺, 大山庵寺, 小幡西新庵寺, 篠田庵寺, 東畑庵寺 (国分寺), (元興寺), (法海寺), (小幡花ノ木庵寺)	(東畑庵寺)	国分寺, 瀬高庵寺, 法性寺, 中島庵寺, 小幡花ノ木庵寺, (元興寺), (東畑庵寺), (甚目寺), (諸桑庵寺)
Ⅳ	A		
	B (勝川庵寺)		

第33表 丸瓦分類表



第58図 丸瓦分類分布図



★ ■ B類・a手法

1. 黒岩廃寺(一宮市)
2. 音楽寺(江南市)
3. 東流廃寺(岐阜県羽島郡笠松町)
4. 長福寺廃寺(一宮市)
5. 勝部廃寺(大山市)
6. 御土井廃寺(岩倉市)
7. 川井薬師堂廃寺(岩倉市)
8. 伝法寺廃寺(一宮市)
9. 官林瓦窯(大山市)
10. 東畑廃寺(稲沢市)
11. 妙興寺(一宮市)
12. 神戸廃寺(一宮市)
13. 薬師堂廃寺(一宮市)
14. 中島廃寺(一宮市)
15. 三宅廃寺(中島郡平和町)
16. 法立廃寺(中島郡平和町)
17. 尾張国分寺(稲沢市)
18. 尾張国分尼寺(稲沢市)
19. 淵高廃寺(海部郡佐織町)
20. 諸桑廃寺(海部郡佐織町)
21. 宗玄坊廃寺(海部郡立田村)
22. 寺野廃寺(津島市)
23. 篠田廃寺(海部郡美和町)
24. 法性寺跡(海部郡甚目寺町)
25. 甚目寺遺跡(海部郡甚目寺町)
26. 清林寺遺跡(海部郡甚目寺町)
27. 弥勒寺廃寺(西春日井郡西春町)
28. 観音寺廃寺(西春日井郡豊山町)
29. 大山廃寺(小牧市)
30. 勝川廃寺(春日井市)
31. 白山瓦窯(春日井市)
32. 高蔵寺瓦窯(春日井市)
33. 小幡西新廃寺(名古屋市守山区)
34. 小幡花の木廃寺(名古屋市守山区)
35. 大永寺(名古屋市守山区)推定地
36. 古観音廃寺(名古屋市昭和区)
37. 極楽寺(名古屋市昭和区)
38. 尾張元興寺跡(名古屋市中区)
39. 鳴海廃寺(名古屋市緑区)
40. 若宮瓦窯(名古屋市昭和区)
41. 西大高廃寺(名古屋市緑区)
42. トトメキ遺跡、名和廃寺(東海市)
43. 法海寺(知多市)
44. 奥田廃寺(知多郡美浜町)
45. 奥田瓦窯(知多郡美浜町)

生産地の状況 次に生産地における状況を見ておくと、篠岡2号窯の丸瓦がⅠ類・c手法に属し、高蔵寺瓦窯の丸瓦がⅢ類・c手法に属する。奥山久米寺、東畑庵寺と同範の瓦を焼成する篠岡2号窯は岩崎17号窯式期に所属し、藤原宮6233A cと同範の軒丸瓦を焼成する高蔵寺瓦窯は、その瓦を供給した勝川庵寺の状況からも7世紀後半に比定され、a手法の開始を7世紀末に遡らせる資料は現在のところ存在しない。SD13の状況から8世紀中葉から後葉にa手法の開始時期はa手法が主体をなすことが確認されたため、a手法の開始時期をおおまかに8世紀前葉から中葉とすることに問題はないように思われる。

6. まとめ

今回の検討結果をまとめると次の4点になる。

- ・尾張国分寺の軒瓦は軒平瓦と軒丸瓦の組合せによりA～Dの4グループに分類することができ、主体となるBグループはさらにB₁～B₃に細分できる。
- ・SD13（鳴海32号窯式～折戸10号窯式期）出土の軒瓦はB₁のみであり、この1群を尾張国分寺第1段階（8世紀後半）、B₂および尾張国分寺廃絶時のSE03（黒笹90号窯式期）出土の主体を占めるB₃を尾張国分寺第2段階（8世紀末葉）、Dグループを尾張国分寺第3段階（9世紀中葉）と設定する。なおA、Cグループは第1段階でB₂を中核として、その周縁に参画した瓦として位置づける。その点でCグループに奈良大安寺と同範の軒丸瓦（平城宮6712-C形式）が存在することは興味深い。
- ・尾張における平瓦製作は、その技法からⅠ～Ⅳ類に大別でき、さらに凹凸面のタタキによって細分できる。尾張国分寺の主体をなす粘土板一枚作りの平瓦（Ⅳ類）は中島郡に集中して分布し、尾張国分寺系軒瓦が存在する寺院では、必ず主体的なあり方を示す。このⅣ類の生産は8世紀中葉から後葉に始まったと考えられ、尾張国分寺造営に際して尾張国内に導入された技法であるとも考えられる。
- ・尾張における丸瓦の製作は、その技法からⅠ～Ⅳ類に大別でき、さらに凸面のタタキ、側面の処理手法によって細分できる。尾張国分寺の主体をなす粘土板玉縁丸瓦（Ⅲ類）で側面調整をしない（a手法）丸瓦は、中島・海部郡を中心に分布し、また尾張国分寺系軒瓦が存在する寺院に多く取り入れられる。この尾張地方におけるⅢ類・a手法の生産は8世紀前葉から中葉にかけて始まったと考えられる。

以上の点を総括すると、8世紀後半の尾張国分寺の創建（第1段階）にあたって、B₁グループの軒瓦が主体的に採用され、少量ながらAグループや大安寺系のCグループも使用された。この時点で平瓦の製作技法に一枚作りが導入されることになる。丸瓦は玉縁丸瓦で、分割後の側面調整を行わないものが主体を占めるが、なお側面調整を行う丸瓦も多く存在し、技法上の変換期にあたる。その後、8世紀末葉（第2段階）にはB₂・B₃グループの軒瓦が尾張国分寺に採用される。このグループの軒瓦は尾張南部の他寺院にも使用さ

れ、それに伴って第1段階で主体となった平瓦、丸瓦の製作技法も拡散する。9世紀中葉以降の尾張国分寺廃絶期（第3段階）にいたって、Dグループの軒瓦が少量使用される。このグループの四葉文系軒丸瓦は各寺院で独自の変化をみせて中島郡を中心に分布することになる。

付記

小論の執筆は1、2、5を蟹江吉弘が、3、4を赤塚次郎が担当し、6は合議の上で蟹江がまとめたものである。なお小論中に使用した分布図は梶山氏の論文をベースに一部を改変し再トレースした。¹³⁾

文末ではあるがこの小論をまとめるにあたり、資料の実見をはじめとする御配意、御教示を多く賜わった。岩野見司、内田伸也、梶山 勝、鎌倉崇志、立松 彰、土本典生、中井公、中嶋 隆、七原恵史、服部哲也、日野幸治、北條献示、一宮市博物館、稲沢市教育委員会、小牧市教育委員会、佐織町公民館、甚目寺町教育委員会、知多市民俗資料館、東海市教育委員会、名古屋市見晴台考古資料館、奈良市教育委員会、美和町歴史民俗資料館の諸氏、諸機関に心から謝意を表する次第である。

註

- 1) 稲垣晋也 「尾張国分寺の発掘調査—遺物（瓦類）」『稲沢市史』所収1968
- 2) 図録『特別展 国分寺』奈良国立博物館1980
- 3) 梶山 勝 「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋市博物館研究紀要 第14巻』1991
- 4) 梶山 勝 「尾張の古代寺院と瓦」『古代仏教東へー寺と窯— 1. 寺院編』第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会1992
- 5) 服部信博 「古代尾張をめぐる若干の問題」『（財）愛知県埋蔵文化財センター年報』1993
- 6) 註(1) 文献参照
- 7) 註(3) 文献参照
- 8) 註(3) 文献参照
- 9) 資料実見。現状では2点確認している。
- 10) 赤塚次郎 「瓦」『勝川』（財）愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書 第1集1984 におけるA・Bグループ
- 11) 赤塚次郎 「勝川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』愛知県教育サービスセンター1985
- 12) 瓦礫舎『古瓦譜』に尾張国山之庄大永寺と記載されて、MM・HⅢ-B型式の拓本が収録されている。
小論では『瓦礫舎』名古屋市博物館調査研究報告Ⅱ1992及び、註(3)文献を参考にした。
- 13) 註(4)図版を使用した。

参考文献

- 大参義一 「尾張出土古瓦の編年の考察」『名古屋大学文学部研究論集史学14』1966
- 森 郁夫 「古代尾張における寺院造営」
- 斎藤孝正 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の様相 篠岡2号窯出土資料を中心として」『名古屋大学文学部研究論集史学36』1990
- 梶山 勝 「春日井市高蔵寺瓦窯の再検討」『名古屋市博物館研究紀要第6巻』1983
- 浅野 清編『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会1968
- 大参義一・岩野見司『新編一宮市史資料編4』1974
- 岩野見司 「考古学からみた古代」『新編一宮市史本文編上』1977
- 岩野見司 「考古学上からみた平和町」『平和町史』1982
- 岩野見司 「第6編 考古」『佐織町史資料編2』1987
- 岩野見司 「第2編 考古」『佐織町史通史編』1988
- 赤塚次郎他「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム2』1991
- 蟹江吉弘他「堀之内花ノ木遺跡」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』1992
- 浅野清春 「第3編 古代」『岩倉市史』1985
- 名古屋市博物館『尾張の古代寺院と瓦』図録 名古屋市博物館1985
- 知多市教育委員会『法海寺遺跡』知多市文化財調査報告第15集1979
- 東海市教育委員会『トムメキ遺跡』1988
- 小牧市教育委員会『大山廃寺発掘調査報告書』1979
- 愛知県建設部・小牧市教育委員会『桃花台ニュータウン遺跡調査報告 小牧市篠岡古窯址群』1976
- 一宮市教育委員会『長福寺廃寺発掘調査報告』一宮市文化財調査報告1 1974
- 岩倉市教育委員会『岩倉市稲荷町・大山町 岩倉南部土地地区画整理事業地内所在埋蔵文化財発掘調査報告 御土井廃寺・西出古墳』1983
- 愛知県教育委員会・(財)愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財情報1』1986
- 愛知県教育委員会・(財)愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財情報5』1990
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書』1980
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』1990
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』1991
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(N)』1992
- 稲沢市教育委員会『東畑廃寺跡発掘調査報告書(V)』1993
- 稲沢市教育委員会『尾張国分寺跡緊急発掘調査報告書』1983
- 東海古文化研究所『小幡廃寺調査概報』1984
- 東海古文化研究所『小幡廃寺第二次調査報告』1985
- 東海考古学研究会『小幡廃寺第三次調査報告』1987
- 名古屋市教育委員会『鳴海廃寺発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅰ次発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡発掘調査概要報告書』1985
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅳ次発掘調査概要報告書』1986
- 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第Ⅴ次発掘調査概要報告書』1992